様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００５０４

研究課題名（和文）詩人・思想家ムハンマド・イクバールの初期詩作品に関する研究

研究課題名（英文）A study on the early poetical works of poet-thinker Muhammad Iqbal

研究代表者
松村　耕光（MATSUMURA, Takamitsu）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・名誉教授

研究者番号：６０１５７３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は詩人、イスラーム思想家イクバール（Muhammad Iqbal, d. 1938）の、1905年の西欧留学以前のウルドゥー語詩作品の全体像を明らかにし、当時の文学・思想状況からその評価を行うことを目的として行われた。その結果、 彼がムスリム・コミュニティー発展のためにムスリムの心情に強く訴えかける内容の詩を書いていることが確認され、初期のイクバールをムスリム意識の希薄な「インド・ナショナリスト」と見做す一般的な考えは誤りであることが判明した。また、彼の詩が掲載されていた雑誌『宝庫』の内容分析により、彼の詩が当時のラホールの文学・思想の一般的潮流の中で異彩を放っていたことも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究によって、現在までのイクバール研究では本格的に取り上げられてこなかった、初期イクバールの、すなわち、1905年の西欧留学以前のイクバールのウルドゥー語で書かれた詩作品の全体像がほぼ明らかとなった。その結果、初期イクバールを「インド・ナショナリスト」と捉える単純な見方を排することが可能となった。また、彼の詩が主に掲載されていたウルドゥー語雑誌『宝庫』の内容分析により、当時の文学的、思想的状況からその文学史的、思想史的意義を明らかにする端緒が開かれた。これらの知見により、詩人、思想家イクバールという一個人のみならず、近・現代インド・ムスリムの文学、思想をより深く理解することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：Concerning Muhammad Iqbal (1877-1938), a famous and important poet and Islamic thinker of British India, this research tried, firstly, to gather and analyze his Urdu poetical works written before his going abroad in 1905, and secondly, to evaluate them in the literary and intellectual trends which were prevalent at that time. As a result, the popular image that before 1905 Iqbal was an Indian nationalist almost devoid of Muslim identity is proved wrong because he wrote some poems in which he ardently urged his co-religionists, inspiring religious feelings, to uphold the Muslim community. The analysis of Urdu magazine Makhzan (Treasure House) shows that Iqbal's poems were different in their contents from the other poems published in this magazine, which means that his poems were unique in the then popular literary and intellectual trends.

研究分野：ウルドゥー文学

キーワード：イクバール　ウルドゥー文学　インド・ムスリム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

詩人、イスラーム思想家として有名なムハンマド・イクバール（Muhammad Iqbal, 1877–1938）の詩作品に関する研究文献は、汗牛充棟、枚挙に遑がないほどである。しかし、それらの主な研究対象となっているのは、独特なイスラーム思想やムスリム・ナショナリズムが展開された後期の作品であり、インド・ナショナリズムの影響下にあったとされる初期の作品は、ほとんど研究の対象とはなっていない。イクバールの初期詩作品に関する研究文献は、ないわけではないが、テキストの変遷過程や詩集未収録作品が考慮されていない。また、当時の文学、思想状況との関連性も視野に収められておらず、きわめて低い研究水準にあると言わざるを得ない。

イクバールの思想は、彼のイギリス、ドイツ留学（1905–1908 年）を境として、初期と後期とに分けられている。初期は、インド・ナショナリズムの影響下にあった時代とされており、「苦しみの叫び（Sada-e dard、1902 年）」、「インドの歌（Taranah-e Hindi、1904 年）」、「苦しみの姿（Tasvir-e dard、1904 年）」、「新しい寺（Naya shiwalah、1905 年）」、「インドの子供たちの愛国歌（Hindustani bachchon ka qaumi git、1905 年）」など、ムスリム、ヒンドゥーのコミュニティー対立を批判し、インド人として協調すべきことを力説する詩を書いているが、イクバールの詩作品を評価するためには以下のような点を考慮する必要がある。

（１）イクバールの詩の現行テキストは初出時とどのように異なっているのか。
（２）詩集に収録されなかった作品はどのように評価すべきであるのか。
（３）イクバール以外のウルドゥー詩人たちは当時、どのような詩を書いていたのか。
（４）イクバール以外のウルドゥー詩人たちは、ナショナリズムをどのように詩で表現していたのか。

このようなことを考慮しなければ、イクバールの初期詩作品を文学史的、思想史的観点から正当に評価することはできないと言わなければならない。

２．研究の目的

本研究は、イクバールの、現在までのイクバール研究では本格的に取り上げられてこなかった、初期イクバールの、すなわち、1905 年の西欧留学以前のイクバールの、ウルドゥー語で書かれた詩作品の全体像を明らかにし、北インド、特にラホールの文学的、思想的状況からその文学史的、思想史的特徴を明らかにし、初期イクバール詩作品の再評価を行うことを目的としている。

従来のイクバール研究は、公刊された詩集――1924 年にラホールで発行されたウルドゥー詩集『鈴の音（Bang-e Dara）』に初期の詩が収録されている――に依拠することが一般的であるが、初出のテキストが考慮されていない。また、初期イクバールの未公刊詩作品等を視野に入れて詩業の全体像を明らかにするという基本的な作業も等閑視されてきた。

初期イクバールの詩業には、「インド・ナショナリズム」というレッテルが貼られたままであり、当時の文学、思想状況からその詩業の特徴を浮き彫りにして評価しようという試みはほとんど行われていない。本研究は以上のような従来の初期イクバール研究の問題点を克服しようとするものである。

初期イクバールの詩業の全体像が明らかとなれば、1905 年の西欧留学以降の後期イクバールの詩業との比較を詳細に行うことが可能となり、初期と後期の詩業の連続性と断絶とを明確に理解することができるようになる。と同時に、初期イクバールの詩業の全体像を明確にすることを通じて、付随的に、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての、北インド、特にラホールの具体的な文学、思想状況も具体的に明らかになることが期待できる。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために以下のような作業を行った。

（１）初期イクバール詩作品の収集

公刊されたウルドゥー詩集『鈴の音』を研究の基礎としつつ、イクバール詩作品拾遺集等を収集し、詩集に収められなかった詩作品の読解を行った。

（２）初出、或いは初出に近いテキストを収集し、詩集のテキストとの校合、及びテキストの異同が持つ意味についての検討

（３）初期イクバール活動期の北インド、特にラホールの文学的、思想的傾向の調査

初期イクバールが詩作していた当時、最も重要な文学的、思想的役割を果たしていたウルドゥー語雑誌『宝庫（Makhzan）』の内容を検討し、当時の文学的、思想的傾向を確認した。この雑誌は、1901 年 4 月にラホールで、イクバールの友人シャイフ・アブドゥル・カーディル（Shaikh ‘Abd al-Qadir, 1874–1950）によって発刊された月刊誌で、当時のウルドゥー語圏で広く読まれ、大きな影響力があった。イクバールは有力な寄稿者の一人であった。

４．研究成果

本研究は、3 年で成果を得る予定であったが、新型コロナ・ウイルス感染症蔓延等の影響によって海外出張が制限されたこともあり、3 年延長することとなった。各年度において、資料の収集とその分析に努め、以下のように初期イクバール研究の基礎となる資料の翻訳を継続的に行った。

（１）2018 年度
① 「ガザル（2）――イクバールのウルドゥー詩（12）――」、『イスラーム世界研究』第 12 号、2019 年、212–221 頁。
イクバールのウルドゥー第 2 詩集『ガブリエルの翼（Bal-e Jibril、1935 年）』よりガザル（ghazal、定型抒情詩）15 篇を翻訳した。
（２）2019 年度
① 「ガザル（3）――イクバールのウルドゥー詩（13）――」、『イスラーム世界研究』第 13 号、2020 年、211–220 頁。
詩集『ガブリエルの翼』及びウルドゥー第 3 詩集『モーセの一撃（Zarb-e Kalim、1936 年）』よりガザル 13 篇を翻訳した。
（３）2020 年度
①「ヒマラヤの山並み」、『印度民俗研究』、2020 年、3–7 頁。
雑誌『宝庫』創刊号（1901 年 4 月号）に掲載された初期イクバールの代表的な愛国詩「ヒマラヤの山並み（Kohistan-e Himalah）」を訳出し、詩集『鈴の音』に収録されたテキスト−−詩集での題名は「ヒマラヤ（Himalah）」――との異同を示した。
②「詩集『鈴の音』より（1）――イクバールのウルドゥー詩（14）――」、『イスラーム世界研究』第 14 号、2021 年、337–345 頁。
詩集『鈴の音』より、イクバールの初期及び後期の政治意識を明瞭に示す短詩 8 篇――「ヒマラヤ」、「サイイド・アフマド・ハーンの墓碑銘（Sayyid ki lauh-e turbat）」、「インドの歌」、「インドの子供たちの愛国歌」、「新しい寺」、「アブドゥル・カーディルに寄す（‘Abd-al Qadir ke nam）」、「ムスリム共同体の歌（Taranah-e milli）」、「ナショナリズムすなわち一つの政治概念としての祖国（Wataniyat ya‘ni watan ba-haithiyat ek siyasi tasawwur ke）」――を訳出した。
③「シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論」、『言語文化研究』第 47 巻、2021 年、89–100 頁。
初期イクバールに影響を与えたと考えられるウルドゥー文学者シブリー（Shibli Nu‘mani, 1857–1914）の詩論を検討し、イクバールに強く見られるペルシア詩批判の観点がシブリーにも見られることを確認した。
（４）2021 年度
①「新しい寺」、『印度民俗研究』第 20 号、2021 年、35–39 頁。
雑誌『宝庫』1905 年 3 月号に掲載された初期イクバールの代表的な愛国詩「新しい寺」を訳出し、詩集『鈴の音』に収録されたテキストとの異同を示した。
②「ガザル」、『印度民俗研究』第 20 号、2021 年、41–46 頁。
初期イクバールに影響を与えたと考えられるウルドゥー詩人ハーリー（Altaf Husain Hali, 1837–1914）の代表的なガザル 3 篇を訳出した。
③「詩集『鈴の音』より（2）――イクバールのウルドゥー詩（15）――」、『イスラーム世界研究』第 15 号、2022 年、289–295 頁。
イクバールの初期詩 4 篇――「苦しみの叫び」、「望み（Ek arzu）」、「詩人（Sha‘ir）」、「暁の星（Subh ki sitarah）」――を詩集『鈴の音』より訳出し、雑誌『宝庫』に掲載されたテキストとの異同を示した。
（５）2022 年度
①「「苦しみの姿」――『宝庫（マフザン）1904 年 3 月号より――』」、『印度民俗研究』第 21 号、2023 年、97–112 頁。
雑誌『宝庫』1904 年 3 月号に掲載された初期イクバールの代表的な愛国詩「苦しみの姿」を訳出し、詩集『鈴の音』に収録されたテキストとの異同を示した。
②「詩集『鈴の音』より（3）――イクバールのウルドゥー詩（16）――」、『イスラーム世界研究』第 16 号、2023 年、187–198 頁。
詩集『鈴の音』には「心（Dil）」という題名でごく一部しか収録されていない、イクバールの初期代表作「ムスリム共同体の嘆き（Faryad-e ummat）」を、初出に近いと思われるテキストより訳出した。
（６）2023 年度
①「チャクバストのウルドゥー詩三篇」、『印度民俗研究』第 22 号、2024 年、88–95 頁。
初期イクバールの愛国詩と比較できるように、イクバールと同時代の愛国詩人チャクバスト（Brij Narain Chakbast, 1882–1926）の代表的な愛国詩「インドの大地（Khak-e watan）」、「祖国の旋律（うた）（Watan ka rag）」及びガザル 1 篇を訳出した。
②「初期詩篇――イクバールのウルドゥー詩（17）――」、『イスラーム世界研究』第 17 号、2024 年、222–232 頁。

詩集未収録の初期代表作「パンジャーブ・ムスリムへのイスラーミーヤ・カレッジの呼びかけ（Islamiyah College ka khitab Panjab ke musalmanon se）」と初期ガザル 2 篇を複数の拾遺集に基づいて訳出した。

6 年間の研究成果は、以下のようにまとめることができる。

（1）初期イクバールの詩作品をできるだけ収集するという点に関しては、拾遺集や雑誌『宝庫』の入手により、相当数収集することができたが、現地調査が思うようにできなかったために、初期イクバールの詩が主に掲載されていた雑誌『宝庫』の全号を確認することはできなかった。雑誌『宝庫』以外の雑誌や新聞等に掲載された詩も確認することができなかった。とは言え、初期イクバールの詩作品の全体像を把握することはかなりの程度できたと思われる。初期詩作品の収集と読解の結果得られた結論や今後の研究課題は以下の通りである。

① 拾遺集には、初出テキストに関する書誌情報がほんど見られない。削除された詩句が収集されているだけのことが多く、テキストのどの部分から削除されたのか記述されていない。また、情報が記載されていても確実性に欠けていることも確認された。最も充実していると思われたギヤーンチャンドの拾遺集（Gyan Chand, *Ibtidai kalam-e Iqbal ba-tartib-e mah-o-sal*, Hyderabad, 1988）にも各所に誤りが認められた。書誌的研究がほとんど行われていない状況であるので、今後、書誌的事実を確定し、初出資料に基づいたイクバール初期詩集を編纂する必要がある。

② 詩集に収録されていない詩が非常に多く、「ムスリム共同体の嘆き」や「パンジャーブ・ムスリムへのイスラーミーヤ・カレッジの呼びかけ」のような重要な詩も詩集に収録されていないので、それらをも視野に収めて初期イクバール研究を行う必要がある。

③ 以下のような詩句により、初期イクバールはインド人意識を強く持つ「インド・ナショナリスト」であり、西欧留学後のイクバールは「ムスリム・ナショナリスト」であると思われている（「インドの歌」は西欧留学前の、「ムスリム共同体の歌」は西欧留学後のイクバールの代表作である）。

私たちのインドは世界一
　　私たちは夜鶯（ブルブル）で、インドは私たちの薔薇の園
　　・・・・・
宗教は憎しみ合えとは教えていない
　　私たちはインド人、私たちの祖国はこのインド

「インドの歌」より

中国もアラビアも、そしてこのインドも私たちの祖国
　　私たちはムスリム、全世界が私たちの祖国
　　・・・・・
私たちを率いるのはヒジャーズの指導者（ムハンマド）様
　　そのご尊名によって私たちの心は安らぎを得る

「ムスリム共同体の歌」より

しかし、イスラーム擁護協会（Anjuman-e Himayat-e Islam、1884 年、ラホールで設立された、ムスリムの福祉、啓蒙団体）で発表された詩「ムスリム共同体の嘆き（1903 年）」や「パンジャーブ・ムスリムへのイスラーミーヤ・カレッジの呼びかけ（1902 年）」では、イクバールは以下のようにムスリムの宗教的心情に強く訴えかけている。

心にあなた（ムハンマド）に対する熱い思いがなければ
　　人が人となるのは難しい
ムスリムとなること――それは愛に殉じる土地に足を踏み入れることである
　　簡単なことであると人は思っているが
愛によって荒廃した心は豊かになることができた
　　この城塞にとって荒廃とは建設の手段であった

「ムスリム共同体の嘆き」より

私（イスラーミーヤ・カレッジ）は
　文字をご存じなかったヤスリブ（メディナ）の御方（ムハンマド）の
　ご教示によって生み出された
　　君たち（パンジャーブ・ムスリム）はこの御方が作られた共同体の旗手である
　　・・・・・
この薔薇や薔薇園は
　文字をご存じなかったヤスリブの御方からの贈り物である
　　おお、庭師（ムスリム）よ、花が萎れてしまわないように気を付けよ

従って、初期イクバールを宗教意識やムスリムとしての帰属意識を（ほとんど）持たない「インド・ナショナリスト」と考えるのは誤りであると思われる。

④ イクバールの死後出版された詩集『ヒジャーズへの贈り物（Armaghan-e Hijaz、1936 年）』には「ムッラー・ザーダ・ザイガム・ローラービーの手帳（Mulla Zadah Zaigham Lolabi Kashmiri ka bayaz）」という、カシミール・ムスリムを訓戒、鼓舞する内容の政治詩が収められているが、イクバールは早くからラホールのカシミール系ムスリム協会（Anjuman-e Kashmiri Musalman、1896 年設立）と関係を持っており、その機関誌などに、父祖の地であるカシミールに関する詩を書いている。カシミール系パンジャーブ・ムスリムという観点からもイクバール研究を進める必要があると思われる。

⑤ 初期イクバールは英文学の強い影響を受けており、彼の詩作品にはその影響が表れていると言われている。この点を詳しく検討するためには、当時のウルドゥー文学圏における英詩翻訳・翻案の状況やパンジャーブにおける英語教育の内容を検討する必要がある。また、初期イクバールは、Mary Howitt, Ralph Waldo Emerson, Jane Taylor, Matilda Betham, William Barnes, Samuel Rogers, William Cowper, Henry Wadsworth Longfellow, Alfred Tennyson 等の英詩を翻案した児童詩をウルドゥー語で数篇執筆している。これらの児童詩はパンジャーブの教科書で用いられたが、これらの詩を評価するためには当時のウルドゥー語教科書の内容について研究する必要がある。

⑥ 研究期間以前に、詩集『鈴の音』よりガザル 12 篇を訳出した「ガザル（1）――イクバールのウルドゥー詩（11）――」（『イスラーム世界研究』第 11 号、2018 年、313–321 頁）と研究期間中に訳出した「ガザル（2）――イクバールのウルドゥー詩（12）――」(『イスラーム世界研究』第 12 号、2019 年)、「ガザル（3）――イクバールのウルドゥー詩（13）――」(『イスラーム世界研究』第 13 号、2020 年)、及び「初期詩篇――イクバールのウルドゥー詩（17）――」（『イスラーム世界研究』第 17 号、2024 年）によって、イクバールが伝統的な古典恋愛ガザルの世界から離脱し、動的なガザルの世界を生み出していく過程が確認された。

あの佳人（ひと）が笑って言った――「私に話しかけないで」
　　その嫌がり方が気に入った

初期ガザルより

おまえは鷹である――お前が為すべきこととは飛翔すること
　　おまえの前にはいくつもの大空が待っている

後期ガザルより

（２）初期イクバールの詩のテキストの異同に関しては、雑誌『宝庫』掲載のテキストと詩集『鈴の音』掲載のテキストとの比較研究を中心に行った。その結果、以下のようなことが判明した。

① 詩集に収録された作品には各所に加筆削除が認められるが、初期イクバールの文学、思想傾向の根本的な修正を迫るほどのものではない。

（３）初期イクバールが活動していた時期の、北インド、特にパンジャーブの文学・思想状況については、パンジャーブの有力な雑誌であった『宝庫』の内容分析により、以下のようなことが判明した。

① 雑誌『宝庫』は前半が散文、後半が詩のセクションとなっている（散文セクションのスペースが空いた所に詩が掲載されていることもある）。散文のセクションにはフィクション、ノン・フィクション様々な内容の短文が掲載されている。詩のセクションに収められた詩は、古典詩や古典詩に倣った詩に加えて、自然の美しさや人生の悲しみ、歓びなどの感情を表現したロマン主義的傾向の作品が多く、散文にせよ、詩にせよ、特に政治的なものは見られない。イクバールの、ムスリム、ヒンドゥーの協調を説く詩は雑誌『宝庫』の中で異彩を放っており、イクバールは当時のラホールの文学・思想状況の一般的な潮流とは異なった立場に立っていたのではないかと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 松村耕光	４．巻 第17号
２．論文標題 初期詩篇――イクバールのウルドゥー詩（17）――	５．発行年 2024年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 222頁-232頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 第22号
２．論文標題 チャクバストのウルドゥー詩三篇	５．発行年 2024年
３．雑誌名 印度民俗研究	６．最初と最後の頁 88頁-95頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 第21号
２．論文標題 苦しみの姿――『宝庫（マフザン）』1904年3月号より――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 印度民俗研究	６．最初と最後の頁 97頁-112頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 第16巻
２．論文標題 詩集『鈴の音』より（3）ーーイクバールのウルドゥー詩（16）――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 187頁-198頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松村耕光	4．巻 第20号
2．論文標題 新しい寺	5．発行年 2021年
3．雑誌名 印度民俗研究	6．最初と最後の頁 35頁-39頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松村耕光	4．巻 第20号
2．論文標題 ガザル	5．発行年 2021年
3．雑誌名 印度民俗研究	6．最初と最後の頁 41頁-46頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松村耕光	4．巻 第15巻
2．論文標題 詩集『鈴の音』より（2）―イクバールのウルドゥー詩（15）―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 イスラーム世界研究	6．最初と最後の頁 289頁-295頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/269339	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松村耕光	4．巻 別巻（6）
2．論文標題 ヒマラヤの山並み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 印度民俗研究	6．最初と最後の頁 3頁-7頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 14
２．論文標題 詩集『鈴の音』より（1）―イクバールのウルドゥー詩（14）―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 337頁-345頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/262508	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 47
２．論文標題 シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 89頁-100頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79326	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 13
２．論文標題 ガザル（3）―イクバールのウルドゥー詩（13）―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 211頁-220頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250335	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村耕光	４．巻 12
２．論文標題 ガザル（２）―イクバールのウルドゥー詩（１２）―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 イスラーム世界研究	６．最初と最後の頁 212頁-221頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/240737	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関